# 駿府城跡天守台発掘調査現場見学会資料　H30.2.24

**見学時間:9:00～16:30（入場 16:00）　調査員による説明時間①10:00　②13:30　入場者数により随時開催**
**＊①、②及び 12:00～13:00 に一部見学エリアを制限します。**

## １　発掘調査の目的

駿府城公園の再整備の一環として、天守台跡地の整備方針決定に向け、天守台の正確な位置や大きさ、構造、残存状況といったデータを得るため、平成 28 年から平成 31 年度まで天守台全体を発掘調査しています。２年目に当たる平成 29 年度は、天守台北側と南側を調査しました。

## ２　発掘調査でわかったこと

### （１）日本一の大きさ

平成 28・29 年度の発掘調査で、天守台は底部で西辺約 68m×北辺約 61m であることが確認でき、大きさがほぼ確定しました。これにより、他城と比較しても日本一大きい（広い）天守台であることが分かりました。

江戸時代の天守台絵図（「駿府城御本丸御天主台跡之図」静岡県立中央図書館蔵【図２】）によれば、堀の水際で西辺約 66m、北辺約 60mであったと記録されており、絵図とほぼ合うことになります。
また、高さが地上から約 12m、堀の水際から約 19mと記録されており、現在は天守台上部が取り壊されているため確認はできませんが、この高さも信ぴょう性が高いと言えます。

### （２）天守台の構造　【写真１】

天守台内部の調査により、石垣の構造が分かってきました。石垣は、外側（写真１手前）から①築石（つきいし）→②裏込（うらごめ）（栗石（ぐりいし）（拳大の川原石）層）→③直径 20～40 ㎝程度の裏栗巻石（うらぐりまきいし）→④盛土層（もりどそう）となっています。栗石層では、築石と直行する仕切りの石列が約 4 間（約 8m）間隔で発見されました。石垣を築く作業の単位を示すものと考えられます。この石列は、特に天守台北辺で確認できます。

図１　調査区見取図

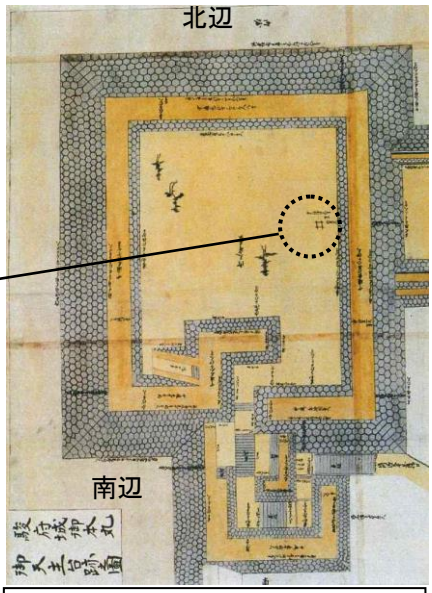


図２「駿府城御本丸御天主台跡之図」
静岡県立中央図書館蔵

## （３）天守台絵図にも残る井戸の発見　【写真２】

天守台中央からやや北東の位置に、石組の井戸を発見しました。内径約 1.8mの円形で、四角く加工された石（間知石（けんちいし））を組んでいます。深いため、底まで全て掘り切れていませんが、現在残っている部分だけでも深さは 3.8mを超えています。江戸時代の城郭における天守台の井戸は、全国でも数が限られ、大変珍しいものです。これは籠城用のものと考えられ、駿府城が、豊臣方との戦いに備えられた実戦的な城であることを物語ります。

## （４）江戸時代初めのものと考えられる石垣　【写真３・４】

天守台南辺は、本丸と接続している様子が確認できました。特に本丸側の石垣は、地面の下すぐで発見され、約 5.8mの高さで残っていることがわかりました。天守台側の石垣と比較して、本丸側の石はやや小ぶりです。また天守台北辺は、特に東側にかけて高い石垣が残っています。本丸側も天守台北辺も、自然石を割って平らな１面を作った程度の加工で、石の間に小さな間詰石を丁寧に入れています。この打ち込みハギと呼ばれる積み方は古く、慶長期の大修築時のものと考えられます。一方で、古い石垣には赤い石や割れた石が多く、火災や地震の影響により劣化している状態が窺えます。

## （５）出土品

堀の中から、大量の瓦のほか、建築木材が出土しています。建物の一部と考えられますが、どの部分に当たるのか今後調査を進めます。盛土内からは、慶長期の築城以前、豊臣方の中村一氏が在城時に使用したと考えられる金箔瓦が、10 点以上見つかっています。

# ３　今後の予定

平成 30 年度は、徳川家康公像の近くまで範囲を広げ、天守台の入口があったと推定される区域を発掘調査します。

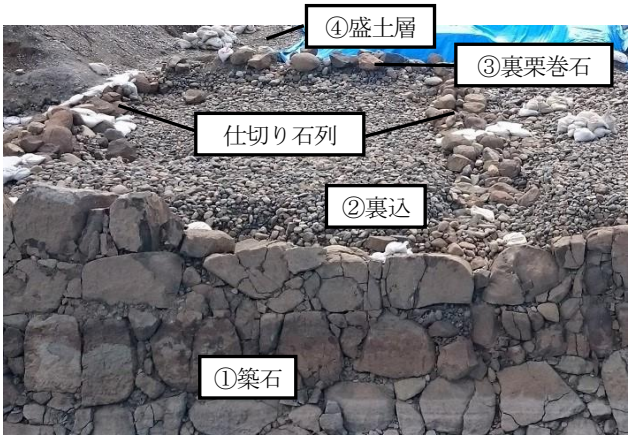


写真１　天守台北辺の栗石層に見える仕切り石列。約４間（約 8m）間隔で並んでいる。

写真２　天守台内部の井戸。四角く加工された石の表面は、ノミで丁寧に調整されている。内径 1.8m、現存深度は 3.8ｍを超える。

写真３　天守台南辺（中央）と本丸側（右）の石垣。南西隅付近は、四角い石で積み替えられている（切り込み接（はぎ））。

写真４　天守台北辺石垣。古い積み方の打ち込み接（はぎ）が見える。焼けた赤い石や割れた石が多い。